

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

ユーランド八橋
代表取締役 **松村 讓裕氏**

神奈川県横浜市出身。東京を中心に事業する家の三代目長男として生まれる。早稲田大学卒業後、松下電器産業（現・パナソニック）に入社。25才の時、父親が経営する会社の再建の為グループ会社であるユーランドホテル八橋経営の為来秋。全国最年少の41歳で秋田県旅館ホテル生活衛生同業組合理事長に就任。現在は秋田・東京で会社経営。(株)村幸、(株)松村コーポレーション、(株)ユーランドホテル八橋の代表取締役社長。



経営の立て直し、人生、信念、社会活動

今回はユーランドホテル八橋の松村讓裕社長にインタビューしました。バブル崩壊によって経営が傾いた父親の事業を引き継ぎ、経営の立て直し、人生、信念、社会活動についてお聞きしました。

工藤 いつもお世話になっております。今日はよろしくお願いたします。まずは松村さんがユーランド八橋の経営をされた経緯を教えてください。

松村 祖父が戦前、東京の日本橋で銭湯と天ぷら屋を始めました。丁稚奉公をしていた会社社長の支援での創業です。戦争で一時全てを失いましたが、すぐに日本橋で飲食業から事業を再開し昭和26年には東京駒込で銭湯も再開しました。二代目の父は様々な事業に手を出すタイプで国内外で色々な事業をしていました。成功失敗色々ありその中の一つがユーランドです。私は大学卒業後パナソニックに就職し3年大阪・東京で営業などを行っていましたが、丸3年で退社し東京にある実家の会社に入社、その後すぐにグループ会社であるユーランドホテル八橋に赴任しました。

工藤 今とは少し分野が違うので意外ですね。どうしてパナソニックだったのでしょうか？

松村 パナソニックを選んだのは松下幸之助さんに興味があったからです。ずっと勤

めるつもりも家業に入るつもりもなかった。当時は「アフリカに井戸を掘りに行こう！」と真面目に考えていました。ところが、母親から「お父さんが自殺しそうだから帰って来て」と電話があり。当時はバブル崩壊で父の事業も債務超過で厳しい状況でしたから店終いのお手伝いをとの気持ちで父の会社に入社しました。入社後1週間で秋田のユーランドを見に行くように言われ最初は1か月ぐらいの秋田生活のつもりがまさかの片道切符でした。(笑)秋田中心で行こうと腹を決めたのは3年経った頃です。

工藤 家族や仲間も少ない状態の中、経営するにあたっての難しさなどを感じたことはありましたか？

松村 秋田に来て初めて「県外人」という言葉を知りました。初めて銀行に国の制度融資を申し込んだ時は「あなたは東京の方だから」と額も条件も変えられたり、店で盗難があった時は警察から10本指全部黒墨で指紋取られたり。秋田の知り合いを作らないと何も出来ないと感じ様々な異業種交流会に入りました。その中で特に青年会議所に嵌りました。社会人になっても学生付き合いが出来る青年会議所は本当に有難く、お陰で秋田で先輩や後輩、信頼出来る方々と沢山知り合うことが出来、私にとって青年会議所は「秋田の基本」です。

工藤 「地方都市の繋がり」は良くも悪くも大都会にはない感覚ですよね。その他に秋田と東京の違いを感じる点はありませんか？

松村 東京は「競争する街」というイメージ。皆が自分のやりたいことをやり競争しているだけで街が形成される。秋田は「養殖が必要な街」。競争より地域づくり。人がいなくなったら継続して商売出来ない。街もなくなります。そして「地域課題」が皆に見えやすいこと。私が育った横浜では地元の課題なんて話題にしなかったし、みなとみらいもベイブリッジもサッカースタジアムも知らないうちに出来ていました。あと秋田は起業への支援が手厚いですね。人も企業も少ない分甘やかされている。ある意味秋田のメリットですね。

工藤 課題が見えやすく「養殖しないと街もお客さんもなくなってしまいうちの地域」だからこそ、社会のためにできることをしなくてはいけない訳ですね。そうした松村さんの想いが、社会活動にもつながっているように思えたのですが、いかがでしょうか？

松村 最初は商売の為の人脈づくり目的で街づくり活動に参加していましたから、責任ある立場や忙しい役割にはやりたくなかったんですが、一度断ったら全てが無くなる気がして怖くて、色々やらせて頂くこ

あきたBizフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

とになり、人前で話す機会も増え「建前も100回言えば本音になる」との言葉通り、今では「企業の目的は社会貢献。国家観なき経営理念は意味がない」と本気で思っています。倒産危機だった会社が秋田の方々のお力添えで生き残ったことも地域や社会活動に強く関わる様になった大きな要因です。

工藤 今まさに世界で起きているこのコロナ苦境はどのように感じていますか？

松村 宿泊飲食業ですのでコロナ禍の直撃をまろに受けています。リーマンショックも東日本大震災もダメージなく乗り越えて来ていましたので、今回初めて支援を受ける立場となりました。ただ、借金が増えたこと以外は全てプラスになっています。会社も自分自身も見直す機会になりました。コロナ禍がなかったらこの先に人生は全く違うものになっていたと思います。今は社会人一年生の様な気分でワクワクしています。「何も諦めない」「全てをプラスに！」精神でコロナ禍を活用したいと思います。でも残る借金は少しでも少なくしたいですね。

工藤 最後に秋田の起業家の皆さんにメッセージをお願いします。

松村 自身の事業の目的、人生の目的は何

なのか「何を持って勝ちとするか」を考えてください。そして支援されて起業する責任を自覚すること。秋田は競争が少なく甘やかしてくれる面があります。それは、今まで秋田の歴史を繋いで来た諸先輩の秋田への思いがあるからです。様々な支援を受けて事業をする以上、先人や地域の方々、将来生れてくる子供たちへの責任を認識して欲しい。最後にちやほやされても直ぐにその気にならないこと。持ち上げられて勘違いし消えてしまった起業家も沢山います。成功するまで諦めなければ絶対目的は達成します。頑張りましょう！

最後にお気に入りの本を教えてくださいました。

松村社長のおすすめの一冊は『戦うことは悪ですか』という葛城奈海さんの本です。

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター 秋田大学2年 小林 恵大

企 画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)

